

〈エッセイ〉

京都丹後から 「松岡先生ありがとうございました」

本 田 進

いつもの冬なら丹後は一面白銀の世界。それが今冬は、全くというほど雪が降らず積もらず。例年とまるで違う冬らしくない丹後の空を、どうしたものかと、ほうっと見上げていた時、久しぶりに松岡先生からお電話をいただきました。今春退任されるとのこと。ご卒業おめでとうございます。先生に初めてお出合いさせていただいてから、早や20年は過ぎたかと思いますが、いつも穏やかな先生のお顔やお話を懐かしく思い出しております。

私達が、松岡先生をはじめ龍谷大学の多くの先生方から、長きにわたりご指導いただきましたのは、京都丹後地域の産業をどうしたら元気に出来るかということについてでした。

私自身は、丹後に生まれ育ち、京都府の地方機関の一職員として、大半の期間を丹後地域の織物業や機械金属加工業、観光産業など、丹後地域の産業振興に関わる仕事に従事させていただき、丹後の元気づくりを進め、ひとりでも多くの方々に喜んでいただこうと職場の同僚や企業者の皆さんと一緒に頑張って参りました。そのような仕事を卒業してから10年が経ちます。

今思うと、私達は「地域のことは誰よりもよく知っている」という思い込みと、もう一つは「蟻の目線」でした。このような狭い視野での私達の取り組みに「鳥の目線」が必要不可欠との、気づきを与えていただいたのが松岡先生でした。

それは、松岡先生のご著書『地域開発と企業成長』『地域産業とネットワーク』『人口減少化における地域経済の再生』の中に松岡先生をはじめ、多くの先生方のご意見、ご賢察が網羅されています。京都丹後地域の産業について、このように多面的、かつ詳細に他地域との比較も含め調査分析された文献は他になく、これからの京都丹後地域産業の振興を進めていく上で、なくてはならないバイブルであり、このようなお取組に対し、改めて心から御礼申し上げます。

今、京都丹後地域でも例外なく農家の高齢化が進み、生産効率の悪い山間地の棚田から荒廃が進みつつあります。私は20年ほど前から、そのような水田で「農薬や化学肥料を使わず安心安全でおいしいお米づくり」を目指して、細々と取り組んでいます。今だ、他の人から見れば趣味の域から脱していません。中山間地における小規模農業のビジネスモデルが出来ないか、そんな思いも持ちながら、経験したことのない暖冬異変を気にしつつ、日々を過ごしています。ぜひまた丹後にお越しいただき、ご指導いただければ幸いに存じます。

松岡先生のご健康とご多幸をお祈りしております。ありがとうございました。